

H30 年度（2018 年度）学部教育改革の強化ポイント

今年度は、看護過程に関する取り組みのまとめを行った。

地域完結型看護教育に関する看護過程演習の改革ポイント・課題

開講学年・科目名と学年	看護過程演習の改革ポイントの要約・課題等
1 年次 基礎看護学 看護学方法論演習 I	<p>事例の大きな変更はしていない。日常生活に関する情報をより具体的に して学生が日常生活をイメージしやすいように配慮した。生活を中心にア セスメントする事例のため、発表会の意見からも、対象者を生活者としてみ る視点は備わっているように感じる。看護計画の発表では、個別性のある具 体的な計画を立案できていた。対象者は疾患を有さず、生活を中心にアセス メントする事例であり、学生が対象者の生活をより具体的にイメージでき るようにしていく。</p>
2 年次 基礎看護学 看護学方法論演習 II	<p>事例の大きな変更はない。日常生活に関する情報をより具体的に して学生が日常生活をイメージしやすいように配慮した。情報収集項目には、「地 域での役割」と「衣生活」を追加した。1 年次と同様に生活者としての情報 収集やアセスメントはある程度はできているが、対象者の疾患や治療、検 査、手術、術後の合併症などに関する学びが十分でないように考える。疾患 や治療による対象者への生活の影響を学んでほしい。対象者の疾患や治療、 治療後の状態等の基礎知識を学んだうえでの生活への影響を学生が考えら れるようにしていくこと、および学生が対象者の生活をより具体的にイメ ージできるような事例にしていくことが課題である。</p>
3 年次 成人看護学 成人看護学方法論演習 I	<p>学生は既に「在宅ケアマインド」「患者を生活者として捉える」などの言 葉を自然に口にするようになった。しかし、実際はどのように取り組むと実 現できるのかといった具体的なイメージは乏しいと考えられる。そのため、 自分に惹きつけたところで学生の理解を促進させ、実習でよりスムーズに 実践できるよう、以下の取り組みを行った。</p> <p>[行動目標の追加]</p> <p>行動目標 4. 対象者を「生活者」として捉えて看護計画を立案するための 自己の課題を明らかにする。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 対象者を「生活者」として捉える意義を述べる。〈講義〉 2) 対象者を「生活者」として捉えて看護計画を立案するために必要な知 識・技術・態度を列挙する。〈講義〉 3) 各自が立案した看護計画は対象者を「生活者」として捉えられている のか、考察する。〈事後レポート〉 4) 対象者を「生活者」として捉えて看護計画を立案するための自己の課 題とその解決方法を述べる。〈事後レポート〉 <p>[書式の改変]</p> <p>・対象者を様々な角度から「生活者」として捉えられるよう、アセスメント 用紙をブラッシュアップし、5 ページから 4 ページに要約した。</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・情報を包括し、看護問題の抽出をしやすくするため、関連図用紙の横に問題リストを付け、用紙サイズをA4版からA3版に大きくした。 <p>[情報収集項目等の追加]</p> <p>「対象者の①発達段階・発達課題、②強み、③サポートシステム」について記載させるようにした。</p> <p>学生の反応としては、下記のような事後レポートへの記載が見られた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対象者を患者として、一人の男性または女性として、どこかの家族の一員として、どこかの会社の一員としてなど、様々な方向から見ていく。 ・「この方は今までどのような地域で生活してきたのだろう」「対象者の強みとなるものは何だろう」という視点をもってアセスメントに取り組む。 ・対象者やその家族とたくさん接して、病気以外の情報をたくさん得るべきである。一人一人の価値観に沿った生活を送ることを支援することによって、対象者の生活に彩りや潤いが生まれ、結果的に病気の緩和につながることもあるだろう。 ・どのようなことなら実施可能であるか、対象者の立場の視点を考慮することや、自分の生活に置き換えてみて、看護計画を立案する。 ・退院後に対象者や家族だけで実践できるように、わかりやすく指導することや、パンフレットなどの使用も検討する。 <p>各自が事後レポートで述べた解決方法を実習で実践しやすくするために、実習開始前に事後レポートを返却し、対象者を「生活者」として捉えて看護計画を立案するための自己の課題とその解決方法を再認識してもらう。今後の課題としては、この実習状況をふまえて前述した改革を評価し、成人看護学における改革の取り組み方を再考することである。</p>
<p>3年次 老年看護学 老年看護学方法論演習</p>	<p>高齢者は複数の慢性疾患や障がいを抱えながら老年期を生きる人にとらえ、疾病や障がいだけでなく、生活機能（活動、休息、排泄、清潔、食事、コミュニケーション）をベースに、対象者のできること（強み）、困難なこと（弱み）、ニーズを見出し、看護のあり方を考えるように導いた。また、現在の生活の場に関わらず、どのような地域の中で生活してきた人かという点にも着目して考えられるように教授した。</p> <p>事例①（脳梗塞による麻痺や高次脳機能障害を抱えた施設入所中の高齢者） 対象のADLやIADL状況から、できること（強み）と困難なこと（弱み）を学生と共に詳細に見出し、どうすれば対象の望む生活に向けた看護が提供できるかについて考える点を強化した。書式の改変はしていない。</p> <p>事例②（認知症症状が悪化し施設の専門棟に入所し3日目の高齢者） 対象者が入所前に生活していた環境や人とのつながりから、入所による生活の変化、症状や生活状況が落ち着いた後の退所後の生活を考慮できるように教授した。施設に入所する前に生活していた地域の環境や、人々とのつながりについて追加した。</p> <p>学生の反応は、事例①では、疾病や障がいが日常生活に及ぼす影響を考慮することや、対象の強みやニーズに着目することの大切さに気付いたという反応が得られた。事例②では、施設入所後の症状のみではなく、生活が安定</p>

	<p>した後は、退所後の生活に目を向ける必要性を認識したとの反応が得られた。</p> <p>課題として、事例①は、施設入所中の高齢者に対する看護を中心とした内容であるが、在宅復帰に向けた看護についても検討する時間を設けたい。事例②では、退所後の生活に目を向けた看護過程も展開できるようにする。</p>
<p>3年次 母性看護学</p>	<p>母性看護の事例は、妊娠期、分娩期、産褥・新生児期と幅広く、どれもそれぞれに看護過程展開の特徴がある。</p> <p>妊婦事例では、家族を含めた対象者の生活を想像できるよう、家族の状況設定、育児や仕事の状況設定を追加した。産褥事例では、対象者の生活に関する情報をすべて網羅して提示するよりも、対象者の状況をアセスメントする上で足りない情報を検討し具体的にどんな情報が必要かを挙げさせる事例とした。追加情報としては、自宅の情報を入れた。また、寮事例を通して、対象への看護を検討する上で、情報は書かれていないが情報を把握する必要性が高いと判断された場合には、何をアセスメントするためにどんな情報を得る必要があるかをアセスメントとして記述するよう求めた。</p> <p>学生の反応として、妊婦事例では、新たに追加した情報により、自然と入院中の家族の状況や生活を想像し、対象者の入院中の心身に影響を与えるものとしてアセスメントに活かすことができていた。また、など、例年にはなかった社会資源についての具体的な活用について言及する学生もいた。産褥事例では、設定や情報量は大きく変えていなかったが、例年に比べて対象理解のために情報収集すべき項目の幅や深さが明らかに増していた。総じて、これまでは生活について触れてはいても、比較的表面的な、一般的な言及にとどまっていたが、この事例の生活をイメージした上で、具体的で現実的なアセスメントができた学生が増えた。</p> <p>今後の課題として、以下が挙げられる。</p> <p>①生活を見据えたアセスメントに対応させて、その具体的な看護方法についてもディスカッションする機会を持つことが今後の課題である。</p> <p>②必要な情報をどのような会話の流れやきっかけづくりで、どのような言葉遣いで聞くのか、また情報を掘り下げていくにはどのように聞いたらよいのか、など、実践場面を想定した具体的かつリアルなコミュニケーションの演習なども必要ではないかと考えている。</p>
<p>3年次 小児看護学</p>	<p>事例では、対象児の成長発達段階とADLの状況をきちんと捉え、入院や治療によってこれらがどのような影響を受けるのか、これから先の発達と退院後の生活を見据えて入院中にどのような支援が必要なのかを考えさせるようにしている。急性リンパ性白血病の好発年齢である幼児期を対象とし、化学療法の寛解導入療法または強化療法を受けた際の副作用や成長発達への影響について、またその際の家族の負担について教授している。</p> <p>8回ある看護過程の講義の中で、少しずつ学生が治療の副作用を理解し、成長発達への影響や、日常生活の中での感染予防等の視点からアセスメントすることができるようになった。</p> <p>急性期のみでなく、寛解後の退院に向けての時期の看護過程展開を取り</p>

	<p>入れることが可能か検討していくことが課題である。</p>
<p>3年次 在宅看護学演習</p>	<p>事例は、老々介護世帯で、脳血管障害後遺症をわずらう要介護度4の70歳の在宅療養者。従来は、臨床看護系科目の看護過程演習が進んだ後半に在宅看護学演習を組んでいたが、学生が退院後の在宅療養生活をよりイメージしながら、臨床看護学系の看護過程演習に取り組めるようにと考え、前半で行うようにした。情報提示は、本人のことのみならず、家族の状況や地域情報をより多く提示できるようにした。アセスメントシートは、病气中心の見方に陥らないように、5領域の視点を盛り込んだ新書式を追加した。看護計画は、問題解決型志向（POS）と目標志向型を合わせた形で、強み（ストレングス）を発掘し、それを活用しながらQOL向上を意図することを強化した。そのほかに、系統立てた看護計画立案までは行っていないが、在宅酸素療法者の事例、在宅看取りの事例、神経難病療養者の退院支援事例を使い、本人と家族と地域との相互作用の中で、地域での多様な生活を支える看護について学生が考える機会を提示している。</p>